

モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献

ーインドからの発信

ラジャゴパラチャリ『人類は抗議する』の編集と出版についてー

藤目ゆき

(はじめに)

モニカ・フェルトンが訪日して、第二回原水爆禁止世界大会と日本母親大会に出席したのは1956年8月のことであった。前年55年7月にはスイスのローザンヌで第一回世界母親大会が開催されており、モニカがそこに参集した世界各地の女性の生き方や思いを描写した『あたりまえの女たち』の日本語訳が、57年に岩波書店から出版される。このように日本で原水爆禁止運動や女性運動の波が高まっていった時代にモニカは平和運動家として、あるいはまた「母親運動の創始者」として、同時代の人々に記憶された。しかし、「母親大会」や『あたりまえの女たち』の名と同時にモニカ・フェルトンを思い出すことのできる大勢の人々もまた、モニカが来日した1956年以降の足跡についてはほとんど知らない。いつのまにか彼女の姿は国際平和運動の舞台から消えてしまっていた。

実は、モニカ・フェルトンは1956年にインドへ渡航して11月にカルカッタで開催された全インド平和会議や12月にニューデリーで開かれた第一回アジア作家会議に出席し、それ以降、13年余りをインドで暮らし、70年にマドラスで永眠している。当初は世界平和評議会(以下、WPCと略称)^①の一員としてインドから反核平和思想を発信することに使命感を燃やしていたが、58年にナジ・イムレの処刑が公表された後にWPCを離れ、作家活動に専念するようになった。インド時代のモニカは、『ラジャジに会う』("I meet Rajaji", Macmillan, 1962年)、『子ども未亡人』("A Child Widow Story", V. Gollancz, 1966年)などの作品で知られる。前者はインドの政治家ラジャゴパラチャリの伝記であり、後者は女子教育事業家スバラクシュミの伝記である。この二冊は2003年に、前者は『ラジャジ(Rajaji)』と改題、後者は原題のまま、2000年にニューデリーにあるカサ出版から復刻版が出ている。二冊とも、今日もおしばしば引用される、インド現代史・インド女性史の名著である。

本稿は、このようなインド時代のモニカ・フェルトンについて、特に1956年から59年にかけての、ラジャゴパラチャリとの邂逅と核兵器廃絶への願いをこめた『人類は抗議する』とその増補版の編集・出版に焦点をしばって紹介する。筆者はこれまでに「モニカ・フェルトンとWIDFの朝鮮戦争真相調査団」(『アジア現代女性史』第7号、2012年)、「モニカ・フェルトンの軌跡 1952-1956」(同前第8号、2013年)を発表しており、本稿はそれらの続編でもある。

^① 世界平和評議会(英語表記はWorld Peace Council, World Council of Peace)は、二度の世界平和擁護大会(1949年にパリ、50年にワルシャワ)で開催された世界平和擁護大会やストックホルム・アピールの運動をふまえて、1951年に発足した国際平和組織である。

第1章 ラジャゴパラチャリとの邂逅

第1節 全インド平和評議会 (AIPC)のカルカッタ平和会議

モニカ・フェルトンはWPCの一員として、1956年11月にカルカッタで開かれた全インド平和評議会 (All-India Peace Council、以下、AIPCと略称)の平和会議に出席する^②。

モニカは1950年代前半にWIDFやWPCとつながる多数の国際会議に出席しており、AIPC会長サイファディン・キッチリをはじめ、AIPC副会長である数学者D.D.コサンビや文学者マルク・ラジ・アナンド、AIPC事務局長のロメシュ・チャンドラらとは互いに旧知であった^③。特にコサンビとは気が合ったらしい。コサンビは『インド史研究序説』の執筆中、一年ほどの間に88通の手紙をモニカに出している。それらの手紙には、インド史に関する学術的見解からWPCの国際活動、家族の近況から共通の知人のゴシップまで書き綴られており、当時コサンビにとってモニカが頼りがいのある、しかも気の置けない友人だったことを思わせる。56年に出版され大きな反響を呼んだ『インド史研究序説』の初版には、尊敬と感謝をこめたモニカへの献辞が書かれている^④。

1956年当時、AIPCはすでにWPCの有力団体であった。AIPCは51年の創立まもなくWPCに参加しており、インド共産党の党员がその活動を主導した。全インド平和会議はカルカッタの会議までに4回開催されている。その間にAIPCは、インド共産党が52年に武装闘争から平和的闘争へと路線を転換したことを背景に、共産党系・国民会議系・クリスチャンなどをふくめて多くの人が幅広く結集する平和団体へと転換をはかって支持者を増やし、54年の周恩来・ネルーによる平和五原則（「領土・主権の相互尊重」「相互不可侵」「相互内政不干涉」「平等互惠」「平和共存」）の発表、55年のバンドン会議における平

^② Monica Felton, *Rajaji, Katha*, 2003, pp.7-11 およびインド共産党機関誌である *New Age (Weekly)*, Nov 25, 1956, p.3, p.15.

^③ AIPCは1951年5月、ボンベイで開催された第二回全インド平和会議において創立された。会長のキッチリ博士 (Saifuddin Kitchlew, 1888年～1963年)は対英独立運動時代に国民会議の指導者であったが、インド・パキスタンの分離独立後、国民会議を離れ、インド共産党に接近した。WPC副会長をつとめ、1952年にスターリン平和賞を受賞。アナンド (Mulk Raj Anand, 1905年～2004年)は英語で書いたインドの貧しいカーストの人々の生活を描いた『Untouchable』(1935)、『Coolie』(1936)などで国際的に著名な作家。日本では『觸るべからず』(前田河廣一郎譯、六人社、1942年)、『苦力』(中村保男訳、新潮社1957年)が出版されている。チャンドラ (Ramesh Chandra)は1939年にインド共産党に入党、52年に党中央委員、58年に党中央執行委員。52年以後、AIPC事務局長をつとめる。66年にWPC事務局長、77年にWPC会長に就任。

^④ モニカ・フェルトンの英国在住の遺族は、88通にのぼるコサンビからの手紙を保存している。筆者は2013年5月に英国を訪問してそれらを拝見し、複写を許可していただいた。それらの手紙の中でコサンビは『インド史研究序説』執筆に関してモニカ・フェルトンが与えた助言に感謝してこの本をモニカに捧げると述べており、実際、Damodar Dharmanand Kosambi, *An Introduction to the study of Indian History* (Popular Book Depot, Bombay, first published December, 1956)の献辞に、'to Dr. Mrs. MONICA FELTON whose critical advice has imposed heavy obligations upon both reader and author.'とある。同書は、桑原武夫が「インド史学界の新巨星—コサンビ氏の『インド史研究序説』について—」(『思想』455号、1962年5月)で紹介し、その後、『インド古代史』と題して邦訳が出版されている(山崎利男訳、岩波書店)が、モニカ・フェルトンに対する献辞に関しては言及されていない。

和十原則の発表を受けて、さらに活気づいていった。インドは非同盟諸国のリーダーとして国際社会における地位を高め、AIPC は植民地主義や冷戦下の軍事同盟、原水爆実験といった国際的平和課題に関してインド政府と協力関係を築いた⁽⁶⁾。

全インド平和会議(1949~1957年)

1949年11月	第1回全インド平和会議、カルカッタで開催
1951年 5月	第2回全インド平和会議、ボンベイで開催。AIPC創立。会長はサイファディン・キッチリ
1952年 9月	第3回全インド平和会議、ジュルンドウルで開催。事務局長にロメシュ・チャンドラ
1954年12月	第4回全インド平和会議、マドラスで開催
1956年11月	第5回全インド平和会議、カルカッタで開催
1957年 5月	第6回全インド平和会議、バンガロールで開催

モニカ・フェルトンが参加したカルカッタ会議は、11月15日から18日にかけて開催された。火急の重要議題はスエズ危機である。AIPC は、スエズ運河国有化はエジプト政府の主権に属する決定であり、イスラエル・英・仏産国のエジプト侵攻は国連憲章に反する露骨な侵略行為であり世界平和に対する脅威であるとして、英仏・イスラエル三国にスエズ地帯からの無条件即時撤収を求め、エジプトとアラブ諸国の闘いに対する支持、平和的解決のために努力するインド政府に対する支持を表明した。核問題、軍事同盟、アジア・アフリカ諸国の連帯、インド・パキスタンの友好なども議題となり、多数の決議が採択された⁽⁶⁾。特に核問題に関しては、AIPC は署名運動の取り組みや米英ソに対する核実験停止の働きかけなど、原水爆禁止運動に積極的に取り組んでおり、カルカッタの会議においても原水爆を平和と人類の未来に対する永続的脅威と指摘し、核実験・核兵器による不断の脅威に人々の意識を喚起し、核実験・核兵器の即時禁止を世界に訴えることを宣言している⁽⁷⁾。

⁽⁶⁾ インドの平和運動史については、Marshall Windmiller, *Communism in India*, University of California Press, 1959, pp.411-432 参照。ただし、この本では1956年のカルカッタ会議について、第5回会議として呼びかけられたものの、ハンガリー事件をめぐる意見の相違のため成立せず、第5回会議は57年のバンガロールまで延期されたとしている(428頁)。が、共産党機関誌『New Age』やWPC機関誌『Bulletin of the World Council of Peace』などで見られる限り、ハンガリー事件問題はインドでは西欧とは違って平和運動の深刻な争点になっておらず、カルカッタ会議は盛大に行われて無事に幕を閉じており、あえてこれを第5回としない理由は見当たらない。よって本稿では、カルカッタ会議を第5回、バンガロール会議を第6回として扱っている。

⁽⁶⁾ 'ALL INDIA PEACE CONGRESS', in *Bulletin of the world Council of Peace*, no.22(3rd.Year), November 15, 1956, pp.11-12, 'ALL INDIA PEACE CONGRESS', in *New Age* (Weekly), November 25, 1956, p.3, p.15.

⁽⁷⁾ インドの当時の原水爆禁止運動については、'Indian Disquiet over Atomic Tests, Workers, Peasants and Women in Disarmament Campaign', in *Bulletin of the world Council of Peace*, February 15, 1956, p.10, 'Each Day Brings Thousands of Signatures; Two Indian States Set High Pace', *ibid.*, July 15, 1956, p.11, 'For the banning of test explosions All India Peace Council delegation to Representatives of the 3 Powers', *ibid.*, AUGUST 1, 1956,

他方、スエズ危機の直前にソ連の軍事介入によって多数の市民が死傷したハンガリー事件に関しては、「憂慮」は表明されたものの、認識も見解も共有されなかった。一致が確認されたのは唯一、「ハンガリー問題が国際緊張を高めて第三次世界大戦を準備する好機として利用されないようにすべきだ」という点だけだった⁽⁹⁾。それはWPCが11月18日のヘルシンキにおける執行局会議を経て発表した、「ハンガリー事件の原因や責任の所在に関しては内部に相異なる意見があるが、ハンガリーの悲劇が国際緊張を高めるために利用されてはならないという一点では共通している」⁽⁹⁾という声明と共通しており、ソ連の軍事干渉に対する非難は回避されている。

ハンガリー事件はWPCの内部、特にヨーロッパの平和運動に深刻な衝撃を与え、WPCに参加する西欧・北欧の平和団体は相次いで内政干渉に反対する声明を出し、モニカ・フェルトンが所属する英国平和委員会では11月4日、理事会が満場一致でソ連政府に対してハンガリーにおける武力行動の中止を求める声明を採択している⁽¹⁰⁾。が、AIPCは態度を明確にせず、AIPCを主導するインド共産党の機関紙『新時代 (New Age)』には「ハンガリー：反革命は打破されねばならなかった」(11月9日)、「ハンガリー：反動の陰謀は未然に防がれる」(11月18日)といったソ連擁護の記事が続いていた⁽¹¹⁾。モニカには内心に違和感を抱いたであろう。

とはいえ、その違和感が覆いがたいものになるのはもっと先のことである。平和運動家としてのモニカの足跡をたどるとき、カルカッタ平和会議は、他の何にもまして、ラジャゴパラチャリとの出会いの契機として意味があった。

ラジャゴパラチャリは9月下旬にマドラスで開かれた平和会議に出席し、スエズ危機と核兵器禁止のために平和運動を強めるよう訴えており⁽¹²⁾、56年7月に彼自身が創刊した『スワラジャ』誌においても反核・平和の論陣を張っていた。エジプトが侵攻された事実こそ核抑止論の無意味さが露呈している。核兵器は戦争抑止どころか弱小国を孤立させ、

p.3などを参照。

⁽⁹⁾ *Bulletin of the world Council of Peace*, November 15, 1956, pp.11-12.

⁽⁹⁾ *Ibid.*, p.2 および 'RED PEACE UNIT SPLIT BY HUNGARIAN ISSUE', Special to The New York Times. *New York Times (1923-Current file)*; Nov 26, 1956; ProQuest Historical Newspapers: The New York Times (1851-2010) with Index (1851-1993)

⁽¹⁰⁾ 1956年2月のソ連共産党第20回大会におけるフルシチョフの特別報告以後、脱スターリニズムの波が高まり、ハンガリーでは同年10月23日に民衆が蜂起した。これに対してソ連軍が武力介入して多くの市民が犠牲になった。24日に首相に任命されたナジ・イムレはソ連軍の介入のもとで解任され、ユーゴスラビア大使館に逃れたが、まもなく逮捕される。このハンガリー事件はヨーロッパの左翼的知識人にも大きな衝撃と失望を与えることになった。イギリス共産党においてはE.P.トムスンらが離党し、「社会主義的ヒューマニズム」を標榜する『ニュー・リーズナー』を創刊し、ソ連共産党流の公式マルクス主義と決別した。モニカもまた、こうした「失望した知識人たち」の一人であった。なお、ベルギー、イタリア、オーストリア、英国、西ドイツ、フランス、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの平和団体がハンガリー事件直後から相次いで声明を発表している(日本平和委員会編『平和運動20年資料集』大月書店、1969年、163~170)。

⁽¹¹⁾ *New Age*, September 9, 1956, p.7, *New Age*, November 18, 1956, p.13.

⁽¹²⁾ マドラス平和会議については、'Madras Peace Conference Shows Again Possibilities of All-In Unity for Peace: Rajaji calls for strengthening of Peace Movement', *New Age*, October 14, 1956, p.14 および *Bulletin of the world Council of Peace*, November 1, 1956, p.12.

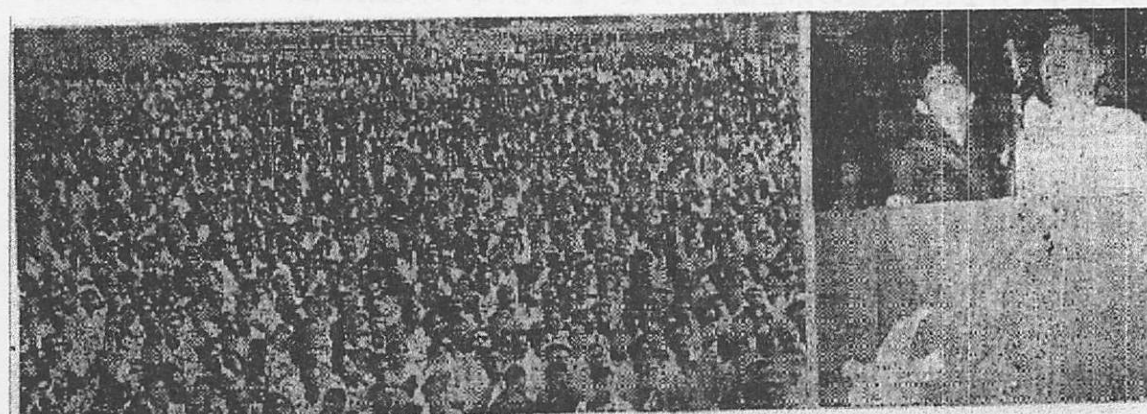
大国による侵略は野放しになる（「奇妙な結果」『スワラジャ』10月20日）。米国の核政策は、威嚇と恐怖で敵を無力化させようとする全体主義であり（「国際的全体主義」同前11月10日）、英仏のスエズ政策は昔日の帝国主義的な武力による威嚇である。そう彼は弾劾し、インドはもはやコモンウェルスを離脱すべきだとさえ主張していた（「すぐに分離しなければならぬ」同11月6日）。ラジャゴパラチャリはカルカッタ会議に直接出席しなかったが、会場ではスエズ危機に関する彼の声明を録音したテープが再生された。

モニカ・フェルトンは、ラジャゴパラチャリの、伶俐でゆっくりとした声で語られる鋭く率直な批判に感銘を受けた。カルカッタの会議が終わると、彼女はラジャゴパラチャリに会うためにマドラスへ向かう⁽¹⁸⁾。そして、ラジャゴパラチャリとの邂逅が、モニカのその後の人生に大きな影響を与えてゆくのである。

⁽¹⁸⁾ *Rajaji*, op.cit. pp.7-11.



会議に参加したインド国内代表、外国代表、エジプト領事。モニカ・フェルトンは前列左。
New Age (Weekly), Nov 25, 1956, p.15



11月18日の全インド平和会議開会セッションの光景。マイクの前に、「英国平和運動指導者
モニカ・フェルトン」。New Age (Weekly), Nov 25, 1956, p.3

第2節 健在の、最も偉大なインド人

チャクラバルティ・ラジャゴパラチャリ(1878年～1972年)はガンジーの親しい友人で、ガンジーは彼を「自分の良心の守護者」と呼んだという。彼はインド国民会議の一員として非暴力不服従の独立運動を闘った民族主義の指導者であり、インドの独立と共和国創設期に国家の要職を歴任した。マドラス州首相(1937年～39年)、インド暫定政府教育相(1946年～47年)を経て、独立後の47年にインド人で初めて西ベンガル州知事になり、48年に最後の英国人総督であったマウントバッテン卿の後を引き継ぎ、インド人として最初で最後のインド総督(1948年6月21日～50年1月26日)になる。インドの共和国宣言とともに総督を辞し、ネルー内閣の内務大臣(50～51年)、続いてマドラス州首相(1952年～54年)に就任した⁽¹⁴⁾。

1956年のAIPCカルカッタ平和会議当時、ラジャゴパラチャリが健康問題を理由として54年4月にマドラス州首相を辞任してから2年8か月が過ぎていた。政府や州の公職を離れ、国民会議の政治活動から遠ざかったラジャゴパラチャリは、サンスクリット語の叙事詩「ラーマーヤナ」のタミール語への翻訳にいそしんでいた。その成果は高い評価を受け、58年にサヒチャ・アカデミー賞を受賞することになる。文学、哲学、音楽に造詣の深い人物であった。そしてその間、ラジャゴパラチャリは核兵器に対する強い反対を世界に訴えていた。彼の反核論を54年に遡って以下に振り返ってみよう。

1954年12月、ラジャゴパラチャリは『ニューヨークタイムズ』紙に原水爆は断じて許されない兵器であり、米ソは国際交渉で相手の出方を待つのでなく、自ら一方的(Unilateral)に核兵器を廃棄すべきであると米国市民に訴える手紙を送る。国際政治のバランス・オブ・パワーや政治的交渉手段として核を扱う態度を峻拒し、政治利害の如何や交渉の成否の問題としてではなく、正邪の問題として核廃絶を訴えたのである⁽¹⁵⁾。この54年は、米国がビキニ環礁で行った水爆実験のために第五福竜丸が死の灰を浴び、日本の原水爆禁止運動が始まった年である。WPCはビキニ実験直後の3月、平野義太郎から報告を受け、原水爆禁止に関する声明を出し、諸国民が自国政府に大量絶滅兵器禁止協定の締結を求めるよう訴えた⁽¹⁶⁾。AIPCが原水爆禁止運動に積極的であったことを前節に述べたが、ネルー首相が54年4月2日核実験の休止協定を提案するなど、インド政府は世界に先駆けて核実験反対の旗幟を鮮明にしていた⁽¹⁷⁾。元インド総督であるラジャゴパラチャリが『ニューヨークタイムズ』紙へ投稿したことは、内外に大きな反響を呼んだ。インド合同通信社のインタビューを受けて、ラジャゴパラチャリは、かくまで原爆を恐れるのは広島記憶ゆえで

⁽¹⁴⁾ ラジャゴパラチャリの伝記には、モニカ・フェルトンの著作の他、K.T. Narasimha Char, *C. Rajagopalachari: his life and mind*, Heritage, 1978, Antony Copley, *C. Rajagopalachari: Gandhi's southern commander*, Indo-British Historical Society, 1986, S.R. Bakshi, *C. Rajagopalachari*, Anmol Publications, 1990, Verinder Grover ed., *C. Rajagopalachari*, Deep & Deep Publications, c1992, C.R. Narasimhan, *Rajagopalachari, a biography*, Radiant Publishers, 1993 などがある。

⁽¹⁵⁾ C.Rajagopalachari, 'Letter to the New York Times to ban Atomic Weapon (原子兵器禁止のための『ニューヨークタイムズ』紙への書簡), Monica Felton, ed., *Mankind Protest: A Collection of Speeches and Statements on Atomic Warfare and Test Explosion by C.Rajagopalachari*, All India Peace Council, New Delhi, 1957, pp.4-7.

⁽¹⁶⁾ 日本平和委員会編『平和運動20年史年表』大月書店、1969年、20頁。

⁽¹⁷⁾ 福井康人「米印合意の功罪」『外務省調査月報』2009年度(4)、2010年3月、38頁

あり、折からの台湾海峡危機によって恐怖がいつそう強まった、と語っている⁽¹⁸⁾。朝鮮戦争・インドシナ戦争に続き、台湾海峡紛争に際しても米国は核兵器使用の可能性をもって威嚇しており、ラジャゴパラチャリはそれに強く抗議したのである。

ソ連が1955年5月の国連軍縮委員会小委員会(ソ連・英米仏・カナダで構成)において核実験停止をふくむ提案⁽¹⁹⁾を行うと、ラジャゴパラチャリはこれを高く評価し、「平和と友好への王道は一方的行動であり、その道を照らすものは勇気である」と述べ、米英がこの提案を受け入れることを求めた⁽²⁰⁾。ソ連の提案は国連で却下され、英米の政府とメディアはこの提案を疑いと冷笑と皮肉で迎えたが、彼は断固としてソ連の提案を支持し、英米の平和を望む市民に「一方的」核軍縮キャンペーンを展開するようアピールした⁽²¹⁾。ラジャゴパラチャリは核兵器が卑劣な大量破壊兵器であり人類の文明を滅ぼすとして、1956年中も核実験に反対する文章を次々に発表した。「抑止力論と平和利用論」は両方とも大国が核開発のためにふりまく二つの幻想である⁽²²⁾とラジャゴパラチャリは喝破した。英米は大量殺戮兵器である核ミサイルを協力して推進しているが、核兵器は人類に敵するものであり、インドは断じて協力してはならない⁽²³⁾。日本への原爆投下は戦争終結には不要であった⁽²⁴⁾。核実験を続ける米国に抗議するため、インドは米国からの経済援助を断念すべきである⁽²⁵⁾。ラジャゴパラチャリはこのように、米英への外交的遠慮にとらわれるインド政府に対しても、毅然と反核政策をとるよう迫った。彼は言う。かつてインドが英国と闘ったように、悪に対しては倫理を武器として戦い、核という人類の敵との戦いのために米英からの援助を断念する犠牲をも払う覚悟が必要だ⁽²⁶⁾。人類の文明を滅ぼし、放射能で人類の未来を汚染する大量殺戮兵器を、共産主義との戦いを口実として正当化することはできない⁽²⁷⁾と。

1956年3月、ラジャゴパラチャリはマドラスの平和会議あてに、ソ連が一方的核廃絶の行動をとるようにWPC-AIPCからの働きかけを願うメッセージを送っている⁽²⁸⁾。彼とAIPCの関係は過去数年の間に大きく変化していた。51年の第2回全インド平和会議当時、ラジャゴパラチャリは内務大臣であった。インド政府とインド共産党の厳しい対立関係を

⁽¹⁸⁾ 'Criticism and Friendship (批判と友情)', *Mankind Protest*, op.cit., pp.8-9.

⁽¹⁹⁾ 'Treaty Banning Nuclear Weapon Tests in the Atmosphere, in Outer Space and Under Water' 米國務省サイト, <http://www.state.gov/t/isn/4797.htm>

⁽²⁰⁾ 'Unilateral action for Peace (平和のための一方的アクション)', *Mankind Protest*, op.cit., pp.50.

⁽²¹⁾ 'Address to the thirty-third Convocation of Delhi University (デリー大学第33会議のための演説)', *ibid.*, pp.51-59, 'Russia, the West and Disarmament (ロシア、西欧、軍縮)', *ibid.*, pp.60-63.

⁽²²⁾ 'The Bomb and the Commonwealth (爆弾とコモンウェルス)', *ibid.*, pp.15-17.

⁽²³⁾ 'India has a Mission (インドには使命がある)', *ibid.*, pp.18-19.

⁽²⁴⁾ 'The Nightmare of Nuclear Arms (核兵器の悪夢)', *ibid.*, pp.22-44, 'Why were Hiroshima and Nagasaki Atom bombed? (なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか?)', *ibid.*, pp.45-46.

⁽²⁵⁾ 'India should sacrifice U.S. Aid (インドは米国からの援助を犠牲にするべきだ)', *ibid.*, pp.47-49.

⁽²⁶⁾ 'Radio-active Pollution (放射能汚染)', *ibid.*, pp.66-67.

⁽²⁷⁾ 'Must Nuclear Preparations go on? (核の準備が続かねばならないか?)', *ibid.*, pp.72-74.

⁽²⁸⁾ 'On the banning of Atomic and other Nuclear Weapons (原爆その他の核兵器の禁止について)', *ibid.*, pp.20-21.

背景として、彼はこの会議のデリー開催を認めないと宣言し、キッチリが率いる代表団の説得にも態度を変えなかった⁽²⁹⁾。しかし、前節で述べたように、インド共産党は平和路線に転じ、AIPCには多数のガンジー主義やクリスチャンが参加するようになる。ラジャゴパラチャリもまた、核兵器廃絶の大義においてWPC-AIPCに歩み寄った。政治思想はリベラルであり、まず『ニューヨークタイムズ』に投稿したことにも示されているとおり、以前はソ連よりも米国に親近感を抱いていたが、55年5月以降のソ連による平和提案を支持し、56年4月にストックホルムで開かれたWPC会議にメッセージを寄せ⁽³⁰⁾、同年8月6日には広島デーに寄せてAIPCにもメッセージを送っている⁽³¹⁾。8月30日にデリーで開かれたAIPC幹部会では、集会冒頭にラジャゴパラチャリの録音された声明が再生されている⁽³²⁾。56年9月のマドラス平和会議にラジゴパラチャリが出席し、平和運動への協力を呼びかけたのは、このような経緯があつてのことである。

元インド総督であり、内務大臣時代には自他共に認める反共主義者であつたラジャゴパラチャリが、ソ連の平和政策を公然と支持してWPC-AIPCに協力し、核兵器廃絶・核実験停止こそが人類的な最重要課題であると国際社会に訴えかけるようになった。それは、当時、核軍拡競争に対してインドの多くの人々が共有していた深い憂慮の表出であり、同時にまた、ラジャゴパラチャリというユニークな個性だからこそできたことでもあつた。「現在生きていて最も偉大なインド人」だと彼を賞賛する人々もいた⁽³³⁾。その含意は、ガンジーを失ったインドにおいて、その継承者として、政権を担うネルー首相よりもさらに偉大な人物だということだろう。コモンウェルスからの脱退や米国援助の拒否は、米英との関係を損ないたくないネルー首相の選択肢にはもとより入っていない。しかし、「平和と友好への王道は一方的行動であり、その道を照らすものは勇気である」。ラジャゴパラチャリは米英との決別さえ辞さない「インドの使命」を訴えることによって、核軍拡競争時代のインドの「良心の守護者」としての役割を果たしつつあつた。

第2章 『人類は抗議する』の編集と出版

第1節 ラジャゴパラチャリとの対話の始まり

モニカ・フェルトンはインドの平和運動関係者からの紹介を得て、ラジャゴパラチャリに会いに行った。ラジャゴパラチャリが68歳の誕生日を迎える1週間前のことである。後にモニカは第一印象をこう書いている。それまで出会った多数の「世界的有名人」は、たいてい「名声があるという以外は、ただの人」であつた。が、ラジャゴパラチャリにはその大きな名声とは別のところで、すこぶる特別な何かがあつた。老齢なのに若者のような好奇心に満ちている。初対面にもかかわらず、モニカは他の誰にも語ったことのなかつた

⁽²⁹⁾ *Communism in India*, op.cit., pp.416-417.

⁽³⁰⁾ 'The Stockholm Session (April 5-9, 1956)', *Bulletin of the world Council of Peace*, May 1, 1956, p.2.

⁽³¹⁾ 'Points of View', *Ibid.*, September 1, 1956, p.10.

⁽³²⁾ *New Age*, September 9, 1956, p.3.

⁽³³⁾ *Rajaji*, op.cit., p.7

自分の人生を語り、そんな自分に仰天した。そして、ラジャゴパラチャリが注目するのは全部未来のことである。モニカは、ラジャゴパラチャリは本人が自覚している以上に未来に寄与すべき人物だと直感した。それは何なのか。まだ分からないが、それをきっと見つけよう。モニカはそう決心した⁽³⁴⁾。

その後の12月23日、ニューデリーでアジア作家会議が開幕する。これは、後の「アジア・アフリカ作家会議」の出発点となった会議である。バンドン会議をはじめとして、植民地支配から脱却しつつあるアジア・アフリカ諸国には連帯の機運が高まっていた。多数の作家が15か国から参集し、日本からも堀田善衛らが参加している。作家たちは、何世紀間もの外国支配によって荒廃したアジアの文学や文化遺産を共同して正当に評価し、植民地主義と封建主義から脱して新しい創作活動を共有する希望を抱いていた。会議では各国からの報告や非アジア圏からのオブザーバーの発言が行われ、24日にラジャゴパラチャリがスピーチを行った。それは、モニカが人々に語りかける彼の姿を見た最初の機会になった。ラジャゴパラチャリは作家の創作と責任について語り、作家の天職は自由に物を書くことであるとして統制からの自由を強調した。アジア作家会議がアジアと非アジアの二分法や「世界が今日患っている病」である冷戦政治を超えて、作家どうしの交流の場となるようにと呼びかけている⁽³⁵⁾。

インド共産党の機関誌『ニューエイジ』にも、モニカがアジア作家会議に出席したという記事はある⁽³⁶⁾。が、彼女は公に発言していない。コーディネイターのマルク・ラジ・アナンが英国代表として発言を求めたのは、モニカではなく、もう一人の英国人女性である詩人のフィリッパ・パレルであった。フィリッパの自伝によれば、会議場にいた英国人は、「有名な共産主義者であるモニカ・フェルトン」とフィリッパだけだった。急に各国代表からの発言が必要になったとき、アナンはフィリッパのところへ駆けつけてきて、脇へひっばっていき、「モニカの政治性はあまりにも有名」なので、フィリッパに英国代表として話すよう頼んだという。何の準備もしていないと驚くフィリッパに対して、アナンは「分かっている。分かっていると。しかし英国からのスピーチがいるんだ。それができるのは君だけだ」と説得したのだという⁽³⁷⁾。このエピソードを通して、モニカが当時「有名な共産主義者」だと認知されていたことが分かる。

それにしても、アナンのような人物があえてモニカに発言させたがらなかった理由はどう考えるべきか。アナンは共産党とつながりの深い、いわゆる「同伴者」であった。AIPC 副会長であり、53年にはWPCから国際平和賞を受賞しており、モニカと類似する社会的立場といえよう。そのアナンがモニカの発言を望まなかった理由の一つは、インド

⁽³⁴⁾ Ibid., p.11.

⁽³⁵⁾ C.Rajagopalachari, 'Asia Speaks: A Voice for Freedom and Tolerance', *Meanjin*, Volume 16 Issue 1, Autumn 1957, pp.63-64. アジア作家会議については M. V. Desai, 'The Asian Writers' Conference December 1956: New Delhi', *Books Abroad*, Vol. 31, No. 3 (Summer, 1957), pp. 243-245, 'Most Comprehensive Gathering So Far of Asian Writers', *New Age*, December 30, 1956, p.16, 'Asian Writers' Conference', *Bulletin of the world Council of Peace*, January 15, 1957, p.12などを参照。

⁽³⁶⁾ 'Most Comprehensive Gathering So Far of Asian Writers', *ibid.*

⁽³⁷⁾ Philippa Burrell, *Remarkable Lives, Letters and Photographs*, http://philippaburrell.com/remarkable/RemarkableLives_41.htm

共産党とその同伴者たちが、この会議を「これまでで最も包括的なアジア作家の会議」とすることを重視していたということだろう。彼がネルー首相の米国からの帰国の遅延を心配してフィリッパにネルー首相を迎えに行くように依頼した理由と同様、国をあげての超党派的事業としてアジア作家会議を演出するためには、「有名な共産主義者」より、政治的に無色なフィリッパのほうが望ましいという意味である。が、理由はそれだけだったのだろうか。運動の思想や路線をめぐる懸隔の兆が、そこに早くも表れていたかもしれない。

アジア作家会議が閉幕し、クリスマスも過ぎた 1956 年の暮れ、モニカはラジャゴパラチャリが娘夫妻と共に滞在していたヒンズスタントゥームズのオフィスに会いに行った。そのときラジャゴパラチャリはインドとパキスタンの緊張にふれ、「アジア諸国が他国からの侵略を恐れて軍事力の増強を図ることは、大国が原水爆の保有が抑止力になると主張するのと同じだ」とし、「すでに核武装を果たしたソ連ではなく、核兵器をもたないアジアこそ真に平和運動を必要としている。平和運動はソ連中心ではなく、アジアの人々の手で行われねばならない」と語っている。このときの会見で、モニカはマドラスに滞在してラジャゴパラチャリと対話を重ねたいという希望を伝え、快諾を得た。ラジャゴパラチャリとモニカの対話がこうして始まった⁽³⁸⁾。

モニカ・フェルトンは 1957 年 1 月、マドラスを再訪する。インド共産党員である P.K. クリシュナン夫妻ら、WPC-AIPC 活動家が彼女の滞在を支援した。P.K はマドラスの医師で、1951 年に創立されたインド・ソビエト文化協会の副会長であり、妻のジャナキも活動家であった。ジャナキは今日も健在で、クリシュナン夫妻はニューデリーの本部から、モニカが行くので快適に滞在できるように世話をしてほしいというメッセージを受け取り、エグモア駅で彼女を迎えた、と語っている。モニカはしばらくクリシュナン家に滞在し、その後、ホテルに長期逗留することになった。P.K はラジャゴパラチャリをはじめ、ジャーナリストのカサ・スバラオや法律家の A.V.ラーマンら、共産党系でないマドラスの名士たちにも友人が多く、モニカに多くの人を紹介した。モニカがマドラスへやってきた頃は夫妻の長男が 8 才、次男が 6 才、三男がまだ 4 才くらいだった。モニカはこの子どもたちが大好きで、とても可愛がったという⁽³⁹⁾。モニカはこうしてマドラスに腰を据え、足繁くラジャゴパラチャリの自宅を訪れるようになった。

⁽³⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., pp.12-19.

⁽³⁹⁾ ジャナキ・クリシュナンのインタビュー、於チェンナイ（旧マドラス）、2012 年 6 月、2013 年 9 月。



インド時代のモニカ・フェルトン



クリシュナン夫妻と子どもたち



クリシュナン一家・友人たちとの記念写真

第2節 反核論のコレクション

モニカ・フェルトンは1957年の1月から3月にかけてラジャゴパラチャリの数々の著作に目を通し、対話を重ねる中で、彼の核廃絶思想が世界平和運動に大きな役割を果たすことを確信する。そしてラジャゴパラチャリの40篇の論説やインタビュー記事、スピーチ原稿や手紙などを編集し、57年5月に『人類は抗議する』と題して出版するのである。同書はニューデリーに本拠を置く全インド平和評議会(AIPC)の出版物として刊行されたが、印刷はマドラスのジュピター出版で行われ、⁽⁴⁰⁾ インド国内と世界平和運動の関係者に送られた。『人類は抗議する』の目次は一覧表のとおりである。

『人類は抗議する』の中で最も早く書かれた文章は1922年の、英国による軍用機開発に警告を発した「航空機」であり、ラジャゴパラチャリの平和思想の根底にあった、戦争と破壊へと進む西欧文明に対する批判が窺える。45年8月17日に書かれた「原子爆弾」はラジャゴパラチャリの反核論の原点といえる。日本に投下された原爆は国際的に使用が禁じられてきた細菌兵器以上に恐るべき、想像を絶する未曾有の破壊兵器であり、戦争終結手段として用いられるべきでなかった、と断言している。

『ニューヨークタイムズ』への手紙に始まる54～56年の文章は前章で紹介した通り「一方的」核兵器廃棄のアピールであり、56年の文章の内3篇は英国の平和団体が発行する『ピース・ニュース』に寄稿された。ラジャゴパラチャリには豊かな西欧的学識があったが、その哲学にはインドの古典的教養とガンジー主義的な倫理性の基礎があった。モニカは西欧近代思想に依拠してきたが、その末路ともいえる核軍拡競争の加熱やハンガリー事件で露呈したスターリニズムの根深さに対して苦悩があった。核兵器が象徴する力の政治ではなく生命の倫理に基礎をおくラジャゴパラチャリの平和思想は、未来への希望をつなぐ新たな拠り所と感じられたであろう。

⁽⁴⁰⁾ Monica Felton ed., C.Rajagopalachari, *Mankind protests : a collection of speeches and statements on atomic warfare and test explosions*, All India Peace Council, New Delhi, 1957.

『人類は抗議する』に収録された文章

年	月	標題	原題	初出
1919	6・8	航空機	The Aeroplane	Young India
1945	8・17	原子爆弾(マドラス基督教大学カレッジユニオン協会における講演)	The Atomic Bomb — speech at Madras Christian College Union Society	The Hindu
1954	12・26	原子兵器禁止のための『ニューヨークタイムズ』紙への手紙	Letter to the New York Times to ban Atomic Weapons	The New York Times
1955	1・6	批判と友情	Criticism and Friendship	The Hindu
	1・17	核兵器は壊滅的大惨事をもたらす	Nuclear Weapons will lead to total disaster	The Hindustan Times
	2・11	爆弾とコモンウェルス	The Bomb and the Commonwealth	インタビュー
	2・28	インドには使命がある	India has a Mission	The Indian Express
	3・5	原爆その他の核兵器の禁止について	On the banning of Atomic and other Nuclear Weapons	メッセージ
	3月	核兵器の悪夢	The Nightmare of Nuclear Arms	スピーチ
		なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか」(『ヒンズー』紙への書簡)	Why were Hiroshima and Nagasaki Atom bombed ? (Letter to the Hindu)	手紙
	5・12	インドは米国の援助を犠牲にするべきだ	India should sacrifice U.S.Aid	インタビュー
	9・21	平和のための一方的アクション	Unilateral action for Peace	手紙
11・26	デリー大学第33回会議のための演説	Address to the thirty-third Convocation of Delhi University	演説原稿	
1956	7・27	ロシア、西欧、軍縮	Russia, the West and Disarmament	Peace News (London)
	7・24	質問と回答—モスクワ放送	Questions and Answers —Radio Moscow	アンケート回答
	7・28	放射能汚染	Radio-active Pollution	Swarajya
	8・6	1956年の広島デーへのメッセージ	Hiroshima Day Message - 1956	

	9・12	爆弾の制御	Taming the Bomb	Peace News (London)
	9・29	核の準備は続かねばならないか?	Must Nuclear Preparations go on?	Sarajya
	10・20	奇妙な結果	A Strange Consequence	Swarajya
	11・10	国際的全体主義	International Totalitarianism	Swarajya
	12・22	大陸間弾道ミサイル	Inter-Continental Ballistic Missiles	Swarajya
	12・14	アメリカの人々へ	To the People of America	Peace News (London)
1957	1・19	放射能汚染	Radio-active Contamination	Swarajya
	1・26	テンポの高まる脅威	The Rising Tempo of danger	Swarajya
	2・9	拡散する脅威	The Spreading danger	Swarajya
	2・16	欧米人の心理	The Western Mind	Swarajya
	2・23	核爆発実験	Test Explosion	Swarajya
	3・2	戦術核	Tactical Atomics	Swarajya
	3・9	この核の暴挙を止めろ	Stop this Nuclear lunacy	Swarajya
	3・27	原爆放射能に関する世界専門家報告	World Experts' Report on Atomic Radiation	Swarajya
	3・25	WPCへのメッセージ	Message to the World Peace Council	手紙
	3・30	ソ連の軍縮提案	Soviet Disarmament Proposal	Swarajya
	4・6	私たちの明白な責務	Our Clear Duty	Swarajya
	4・17	『CURRENT』へのメッセージ	A message to Current	Current
	4・20	核全体主義	Nuclear Totalitarianism	Swarajya
	4・20	悪法と悪薬	Bad Law and Bad Medicine	Swarajya
	4・20	増大する脅威	The Greater Danger	The Indiana Press
	4・14	『ニュー・ステーツマン』誌への手紙	Letter to the New Statesman	手紙
	イースタ ー	『マンチェスター・ガーディアン』紙への手 紙	Letter to the Manchester Guardian	手紙

第3節 あくまで「一方的」核廃棄・核実験中止を求めたラジャゴパラチャリ

1957年1月～4月の17篇を、ラジャゴパラチャリはモニカとの対話と同時進行で発表した。57年の年頭、英国政府は水爆実験のために太平洋クリスマス島周辺を3月1日から8月1日までを危険水域に指定すると宣言する。日本の原水爆禁止団体が実験中止を訴え、日本政府も中止を要請したが、英国は実験を強行する姿勢であった。かかる情勢を背景にラジャゴパラチャリとモニカは対話を重ね、ラジャゴパラチャリの反核論は鋭さを増した。

ラジャゴパラチャリは日本の原水爆禁止アピールを擁護し、米英政府を厳しく批判した。米国は侵略戦争準備に巨費を投じて核戦争の脅威を高め、核兵器を世界に拡散しようとしている（「テンポの高まる脅威」1月26日、「拡散する脅威」2月16日）⁽⁴¹⁾。戦術核兵器のアジア配備は災禍の源であり、パキスタンとインドの関係をも悪化させる（「戦術核」3月2日）⁽⁴²⁾。核攻撃をドイツでなく日本に行ったのは、アジア人を軽んじる意識の表れである（「欧米人の心理」2月9日、「核爆発実験」2月23日）⁽⁴³⁾。水爆実験中止を求める日本からの抗議を聞き入れない英国政府、核を拡散する米国は世界を脅威にさらしている。核実験は全世界を放射能で汚染し、次世代をも苦しめることになる。日本からの原水爆禁止の訴えを孤立させてはならない（「この核の暴挙を止めろ」3月9日）⁽⁴⁴⁾、と。

ラジャゴパラチャリは常にインド政府の責務を強調した。56年中にもスエズ危機や放射能汚染をめぐってインド政府が米英に毅然たる態度をとるよう求め、コモンウェルス離脱や米国からの援助の断念という犠牲を払ってもインドは平和の使命を全うすべきだと提唱していたが、57年に英国がクリスマス島核実験を通告すると、インドにはこれに抗議して中止させる責務があり、英国がそれを却下するならインドはコモンウェルスを離れるべきだと主張した（「私たちの明白な責務」4月6日）⁽⁴⁵⁾。米英は共産主義への恐怖を煽って、人類の生命と未来の基礎を壊す国際犯罪を続けている。共産主義の脅威より核汚染のほうが危険である。日本からの感動的なアピールさえ効果がなく実験が行われようとしている今、インドがコモンウェルスに留まるのはとてつもない犯罪の共犯になることであり、もはや離脱すべきである。彼はそう訴えたのである。

ラジャゴパラチャリは英国の新聞や雑誌にも手紙を送り、核実験の一方的中止が採るべき唯一の道だと英国市民に訴えた。『ニュー・ステーツマン』誌が労働党の核実験停止決議にふれて核問題を論じた巻頭には、核問題を「有利な交渉材料」という賭事の言葉で扱っている。だが核問題は、「政治」や「科学」よりも、「倫理」の問題である。核実験は邪悪であり、悪しき行いはやめなくてはならない。ラジャゴパラチャリは同紙にそう書き送って、強く「一方的」核実験中止を訴えた（「増大する脅威」『ニュー・ステーツマン』紙への手紙）4月14日）⁽⁴⁶⁾。同紙はこの手紙を歓迎し、4月27日の投稿欄に掲載してい

⁽⁴¹⁾ 'The Rising Tempo of danger', *Mankind Protests*, *ibid.*, pp.85-86, 'The Spreading danger', *ibid.*, pp.87-88.

⁽⁴²⁾ 'Tactical Atomics', *ibid.*, pp.92-93.

⁽⁴³⁾ 'The Western Mind', *ibid.*, pp.89-90, 'Test Explosion', *ibid.*, p.91.

⁽⁴⁴⁾ 'Stop this Nuclear Lunacy', *ibid.*, pp.94-95.

⁽⁴⁵⁾ 'Our Clear Duty', *ibid.*, pp.101-103.

⁽⁴⁶⁾ 'Letter to the New Statesman', *ibid.*, pp.112-113. 'Letter to the Manchester Guardian', *ibid.*, pp.114-116.

る⁽⁴⁷⁾。その読者には、ラジャゴパラチャリの声明に共感する人が少なくなかった。後に同紙は、英国の新しい反核運動団体・CNDの創出に大きな役割を果たすようになる。

モニカはラジャゴパラチャリの文章を次々に読み、また対話を続ける中で、英国のクリスマス島実験や米国戦術核配備に反対して「一方的」核兵器廃絶を訴えるその主張に共感し、論集として出版することを思い立った。その思いは、WPCへの帰属意識と結びついた平和運動家としての強い使命感に発していた。ラジャゴパラチャリとモニカは文化背景も政治背景も年齢も全く異なっていたが、反核思想を通じて同志的な共感と友情が生まれていた。57年春にモニカが本の編集・出版を申し出た時、ラジャゴパラチャリはその意義に懐疑的だった。モニカは、彼女自身がラジャゴパラチャリとの対話によって「核兵器廃絶のために最も早い、そしておそらく唯一の途は一方的廃棄」だと考えるようになったと主張すると、「たいていの人は簡単に考えを変えまい」。が、本当にモニカがそうしたいなら異存は無い、と出版を認める⁽⁴⁸⁾。このように、『人類は抗議する』の編集は完全にモニカの発案から始まったことであり、同書はラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信しようという彼女の強い意志がなければ出版されなかった本である。

ラジャゴパラチャリは3月末、WPCに反核運動に集中するよう励ますメッセージを送っている。大意をまとめると、次のようになる。

「WPCはオーストリア政府にウィーンからの退去を求められている。WPCは、WPCが平和団体であり、米ソいずれの系統であれ政治団体ではないと確認すべきである。AIPCも時として共産主義支持組織と疑われる。自らの起源は消し難い。だからこそ私はAIPCが国際平和を守り友好を促すという一点で活動し、それ以外の政治を避けるようにと一貫して助言してきた。

今日、WPCが核兵器全面禁止、核爆発実験即時中止という大事業に集中することが絶対に必要である。世界の平和団体が、戦争と平和一般ではなく核問題に積極的に集中するならば、未だ核兵を持たない国々の政府を反核の闘いの共同戦線組織化にも希望がある。核大国は世界に敵対して冷戦下の熱戦を遂行しているが、私たちは実際に無防備状態だ。平和団体こそ、非核保有国に行動を起こさせるべきだ。WPCは今こそこれを熟考すべきだ。行動の機は熟した。核兵器保有国にも抑止力を疑う人々、政府の核政策を変える活動へと向かいうる人々がいる。WPC執行局は行動を集中させるべき好機を迎えている」⁽⁴⁹⁾。

ラジャゴパラチャリは書き上げたばかりのメッセージをモニカに見せて、WPC関係者は考えが凝り固まっているため自分の助言を容れまい、と言った。モニカは「可能性はある」と言い返し、彼もまた以前はAIPCの平和集会開催を許さなかった事実を思い出させた⁽⁵⁰⁾。人の考え方も運動の方針も変わる。WPCは変わるべきだ。モニカはそう考えていた。

⁽⁴⁷⁾ *The New Statesman and Nation*, April 27, 1957, p.543.

⁽⁴⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., Ibid., p.59.

⁽⁴⁹⁾ 'Message to the World Peace Council', *Mankind Protest.*, op.cit., pp.97-98.'

筆者により大意を要約。なおこの時期のWPCのブレチンには、オーストリア政府の非道を弾劾する仲間内の激励メッセージが飛び交っている('In Defense of Peace', *Bulletin of the World Peace of Council*, April 15, 1957, p12) 最中である。WPCがラジャゴパラチャリからの提言をどう受けとめたかに関する文書資料は未だ見つからない。

⁽⁵⁰⁾ *Rajaji* op.cit., pp.40-41.

第3章 『人類は抗議する』の反響

第1節 AIPCのバンガロール会議とWPCのコロンボ会議

『人類は抗議する』出版からまもない1957年5月24日から26日にかけて、AIPCは核実験反対のために全インド平和会議をバンガロールで開く。バンガロール近在の政界・宗教界・法曹界・学術界の名士で構成するレセプション委員会が、インド各地から集まった500人以上の代表を歓迎した。モニカ・フェルトンも、WPC事務局のアイヴァー・モンターギュとともに出席する⁽⁵¹⁾。二人とも英国平和委員会の会員であり、モニカの当時の肩書きは「英国平和委員会副会長」である。折しも会議直前の5月22日、インドの下院議会はインド政府の支持を得て、米英ソ三国に対して核実験即時停止を求める決議を全会一致で採択した⁽⁵²⁾。バンガロール会議は盛り上がり、核実験即時停止を求める決議をあげ、全国規模の核実験反対運動のための行動委員会も発足させた。ラジャゴパラチャリはこの会議に主導的な役割を果たし、開会スピーチで「私たちのありとあらゆる努力を集中し、冷戦と核実験を妨げるために力を出し合おう」と呼びかけ、核兵器開発・核拡散の危険性や核実験停止に向けたソ連の提案、インドの議会と政府の積極的姿勢にふれ、AIPCの大きな責任を指摘して平和運動の強化を訴えている⁽⁵³⁾。

それから2週間余り後、6月10日から16日にかけて、WPCはアジアで最初の会議をセイロン（現スリランカ）の首都コロンボで開催する。「核実験は現在進行中の軍拡競争の最高表現であり、恐るべき原子戦争を引き起こさずにはやまない」として核実験即時中止を訴えるコロンボ・アピールを発表した国際会議である⁽⁵⁴⁾。モニカはもとより、ラジャゴパラチャリからの3月のWPCに送ったメッセージを読んだ活動家たちは彼のコロンボ会議出席を強く求めた。が、健康状態が思わしくなかったラジャゴパラチャリはモニカが自分の代理としてコロンボへ行くように言い⁽⁵⁵⁾、平和団体に核実験中止キャンペーンに集中するよう求め、英国が水爆を断念し冷戦からの中立を宣言するよう求めるメッセージをコロンボ会議に送っている⁽⁵⁶⁾。かくしてモニカは『人類は抗議する』とラジャゴパラチャリのメッセージを携えて、コロンボへ行った。

⁽⁵¹⁾ 'Bangalore Peace Convention: Central Theme was Demand for Suspension of Nuclear Test', *New Age*, June 2, 1957, p.6.

⁽⁵²⁾ 'Stop nuclear tests', *The Hindu*, May 24, 1957.

⁽⁵³⁾ 註(51)に同じ。

⁽⁵⁴⁾ コロンボ会議については、日本平和委員会編『平和運動20年運動史』大月書店、1969年、126～128頁、『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』（ピープルズ・プラン研究所発行、2012年、CD版）の172～174頁、216～218頁、278～279頁、481～486頁（「1957年7月3日 第三回全国総会報告並びに決定 原水爆禁止日本協議会」）、487～499頁（「第四回全国理事会報告並資料 1957・10・10 原水爆禁止日本協議会」）、508～518頁（「国民使節派遣に関する経過報告（6・30）」）などを参照。

⁽⁵⁵⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年6月3日。米国のプリンストン大学図書館が所蔵するMaria Rosa Oliver Papersの中に、モニカ・フェルトンが1958年から66年にマリア・ロサ・オリヴェルへ宛てた手紙が保存されている。

⁽⁵⁶⁾ 'Message to the World Peace Council: June 1957', C. Rajagopalachari, *The Voice of the Uninvolved: speeches and statements on atomic warfare and test explosions*, p.87.

コロombo会議には70か国から402人が参加し、日本からは小畑忠良(団長)、羽仁五郎、平野義太郎(日本平和委員会)、安井郁(原水爆禁止日本協議会)ら30名前後の代表団が参加した。日本代表団にとってコロombo会議での大きな目標は、日本で8月に開く第三回原水爆禁止世界大会の準備を進めることであった。そのための集会在コロombo会議の正式な催しとして14日夜に開かれ、20か国の100名が参加している。安井郁からの経過報告に続いて、各国から世界大会準備状況の報告があり、第1回世界大会に中国代表団の団長をつとめた劉寧一、第2回世界大会に出席したモニカ・フェルトンが世界大会の報告を行った。モニカはその発言の中で、「今度の世界大会を真の国際会議にしてほしい」と強く要請した。後に原水協事務局で報告にあたった武藤一羊は、クリスマス島核実験問題を背景に各国で原水爆禁止に対する熱意が高まっており、日本代表団が接した各国代表は異口同音にモニカと同様の要望を異口同音に強調していた、と報告を結んでいる⁽⁵⁷⁾。

モニカは、コロomboに集まった平和活動家たちの多くがラジャゴパラチャリの主張に共感していると感じた。なかでも日本代表団の反応は特別だったという。平野義太郎と岡倉古志郎らは8月に東京で開催予定の原水爆禁止世界大会にラジャゴパラチャリを招待するため、コロombo会議終了後、マドラスを訪れた。モニカは彼らをラジャゴパラチャリの家へ案内し、引き合わせている。マドラスはアジア風邪が猛威をふるっており、ラジャゴパラチャリもまだ完全に回復していなかったが、面会を快諾した。話題は過去の日本の戦争犯罪から未来の核廃絶に向けて日本が果たすべき役割、古代のアジア諸民族の交流史やアジアの宗教にまで及び、沖縄の核基地化、日本再軍備問題に関する意見交換も行われた⁽⁵⁸⁾。ラジャゴパラチャリの訪日は結局実現せず、8月の原水爆世界大会にはカカ・カレルカーらが参加している⁽⁵⁹⁾。

コロombo会議と前後して、モニカはアーンドラ州ビジャヤワダへ出かけ、インド全国女性連合会(National Federation of Indian Women; NFIW)の第二回大会に出席し、核兵器・核実験の危険を訴えている。この大会にはソ連、ルーマニア、チェコからの代表もまじえ、インド各地から353人の代表が集まった。インド女性の間からも、核実験の継続は流産や死産、生まれてくる子どもたちへの悪影響を引き起こし、女性たちが最もひどい犠牲者に

⁽⁵⁷⁾ 武藤一羊「コロombo会議活動報告」(前掲「国民使節派遣に関する経過報告(6・30)の一部として『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』所収、512~514頁)。なお、この報告文には、インド国内では5月中に第三回世界大会準備会議が発足し、「政界の長老のラジャゴパラチャリ氏はじめ多数の国民会議派議員、ネル首相の姪ラメッシュワリ・ネル女史などが積極的に参加」しており、「コロombo会議ではチャンドラ夫人とゴーシュ夫人が特に世界大会問題に責任を持って活動した」(513頁)とある。さらに世界大会が終わった後の報告では、「インドではアジア連帯委員会が中心となり、五月二五日ニューデリーで開かれた大衆集会を機会にインド国内準備会が発足した。この準備会はきわめて広汎な性格をもち、百名にのぼる国民会議は国派議員が参加した。とくにインド政界の長老であるラジャゴパラチャリ氏の積極的参加の意義は大きく、ネル首相の従妹にあたるラメントリ・ネル夫人が準備会の会長になったことも、特筆すべき出来事であった。またガンジー主義者の大同団結した巨大な組織であるサルヴォダーヤが、東京大会支持をきめ、大統領候補であるカカ・カレルカー氏を代表にえらんだことも、世界大会を支持するインドの広汎な動きを示す事実であった」(前掲「第四回全国理事会報告並資料 1957・10・10 原水爆禁止日本協議会」『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』493頁)と報告されている。

⁽⁵⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., pp.60-65.

⁽⁵⁹⁾ 前掲『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』220頁

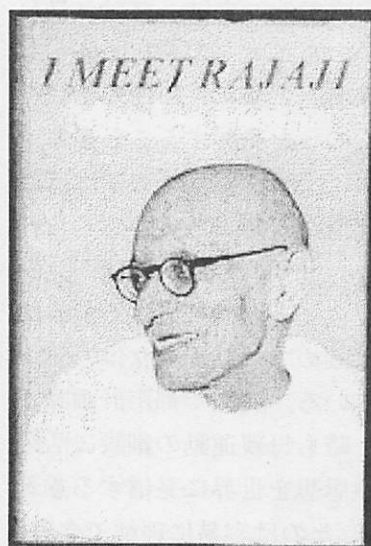
されるとして、核実験に反対する声があがっている⁽⁶⁰⁾。この頃のモニカは、ラジャゴパラチャリの反核・平和思想に強く共感し、AIPC や NFIW といったインドの平和団体・女性団体がラジャゴパラチャの提案する方向へと進み、それが WPC や WIDF の国際運動を力づけ、国際的な運動がソ連や英米政府の政策に変更を迫るものへと発展することを希望していた。そして AIPC の全インド平和会議や WPC のコロombo会議の熱気、『人類は抗議する』に対する好意的反響などによって、その希望は十分に実現が可能であると感じられていたであろう。

が、その実現は容易でなかった。コロombo会議の頃、モニカは『人類は抗議する』の反響に励まされ、ラジャゴパラチャリの伝記を書く決心をすでに固めていた。彼女は、第二次大戦下に軍需工場で働く女性の群像を描いた小説を出版している。英国で都市計画家として働いていた時も、また朝鮮戦争時代の平和運動に関与した時も母親運動の創設に活躍した時も、彼女は常に書いてきた。ラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信する意義を確信したモニカが、その伝記の執筆に使命を感じ意欲を燃やしたのは容易に理解できる。書き上がるまではマドラスに留まらねばならない。他方、モニカの執筆は作家としての自律的活動であり、WPC の任務だったわけではない。モニカは英国平和委員会の一員として WPC 執行局に送り出されているという形であり、AIPC にとってのモニカは、WPC 執行局や英国平和委員会からやってきた「外国人ゲスト」以外の何者でもない。『人類は抗議する』は AIPC から刊行されたが、それは AIPC ではなくモニカの企画と労力の成果であり、AIPC が依頼したわけではない。このようなモニカの立場と活動については、WPC 執行局・AIPC・英国平和委員会とモニカの四者間の調整と承認が必要であった。コロombo会議の間にそれはいちおうゴードン・シャッフアーをふくむ関係者の間で話し合われ、モニカが WPC 執行局に引き続き留まることになった⁽⁶¹⁾。とはいえ、英国平和委員会と AIPC がモニカのマドラス滞在やラジャゴパラチャリとの関係を積極的に望んだわけではない。インドからの反核思想の発信によって国際平和運動に貢献するというモニカの願いは、WPC に関する限り、WPC 執行局 AIPC・英国平和委員会の中でその組織を掌握する共産党員たちとの緊張関係を内包しており、危ういバランスの上にあったと言わざるをえない。

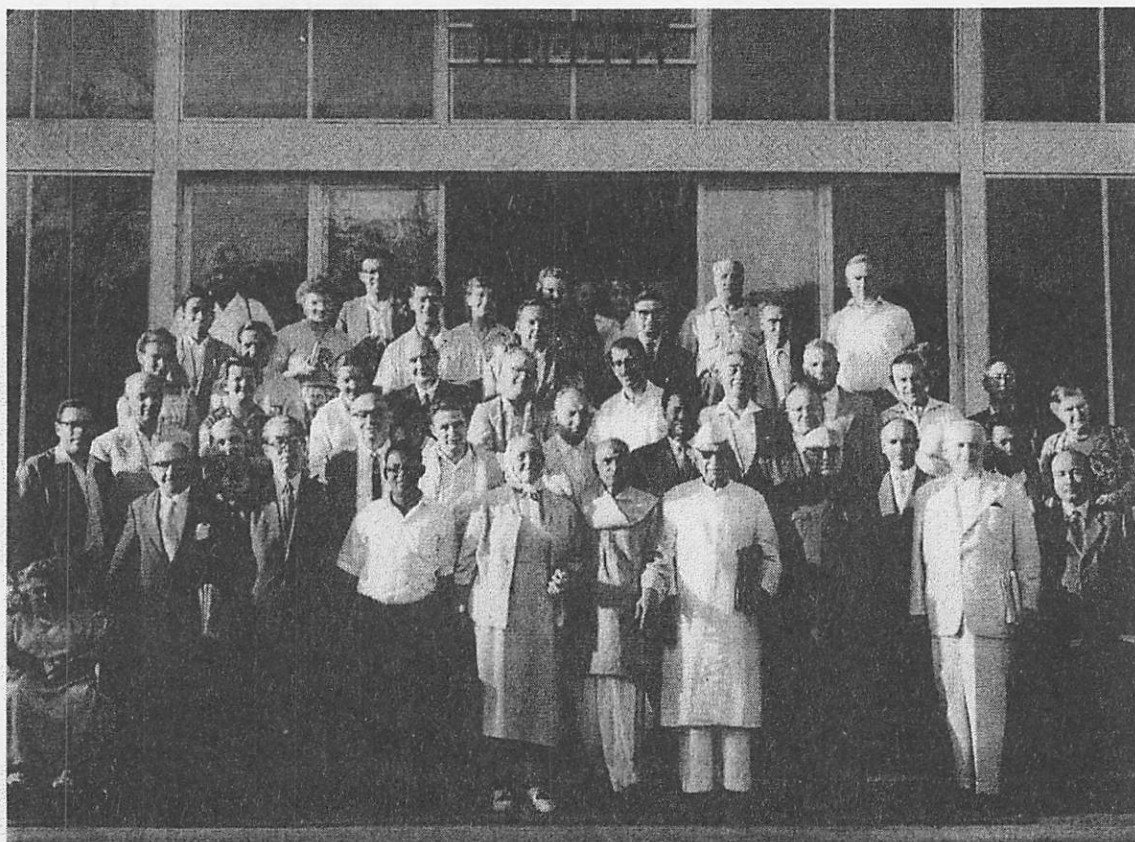
⁽⁶⁰⁾ 'CONFERENCE OF NATIONAL FEDERATION', *New Age*, June 23, 1957, p.16.

インド全国女性連合会は、1954年6月にカルカッタに18州から830人の代表が出席した全国女性会議で創立された。共産党系の女性大衆団体であり、WIDFに参加していた。

⁽⁶¹⁾ モニカ・フェルトンのマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年7月2日



I MEET RAJAJI(ラジャジと会う) マクミラン、1962年



1958年3月のWPCニューデリー会議
国際会議場ヴィガン・バーワンの前にてWPC支部執行局とスタッフの集合写真
モニカ・フェルトンは後列左から二番目(?)

第2節 WPCからの離脱

1957年の世界には、従来の国際平和運動で唯一といってよい大きな役割を果たしてきたWPCとは別に、新しい平和運動が登場しつつあった。ソ連政府が57年6月に核軍縮をめぐる英米との交渉のネックになっていた核監視システム導入に関する同意を表明する⁽⁶²⁾一方、英国によるクリスマス島実験の強行、米国による戦術核配備計画が進むといった状況を背景に、核廃絶への「一方的行動」を求める新しい運動が世界各地で始まりつつあった。英国のCND(Campaign for Nuclear Disarmament、核軍縮キャンペーン)などの運動がそれである⁽⁶³⁾。ラジャゴパラチャリはこのような、WPCの枠組みを超える新しい平和運動の中で注目され、支持を得た。遅くとも57年秋までにE.P.トムソンとのつながりが生まれ、E.P.トムソンらが刊行する『ニュー・リーズナー』は、58年春にラジャゴパラチャリの「積極的平和共存」という論説を載せている⁽⁶⁴⁾。

モニカ・フェルトンは57年秋にはホテル住まいをやめ、貸家を借りている。ラジャゴパラチャリとの対話は続き、話題は新しい平和運動の状況、英国共産党のハンガリー事件に対する評価、E.P.トムソンの離党、百花運動を終焉させた中国の不寛容といったスターリニズムの諸動向にも及んでいた⁽⁶⁵⁾。ソ連がスプートニクを打ち上げた後、ラジャゴパラチャリはマドラス州知事時代にフルシチョフと会ったという話をする。「大国が一方的核兵器廃止を行えば他に後が続く」と説得しようとしたが、フルシチョフはそれが弱さの表明と受け取られると危惧していた。しかし今やソ連が核実験を中止しても誰も弱さの表出とは思わないだろう、とラジャゴパラチャリは語った。モニカが彼に、フルシチョフへ手紙を書いてそう言うように勧めると、彼はそんなことは何の役にたつまい、ソ連は聞き入れまいと否定的で、モニカが重ねて勧めてもまるで論外という調子であった。が、まもなく彼は実際にフルシチョフに手紙を出し、モニカを驚かせた⁽⁶⁶⁾。

ラジャゴパラチャリは、57年11月9日付けでフルシチョフに最初の手紙を送っている。マドラスでの会談の回想から始まり、今こそソ連政府が一方的核兵器使用中止を宣言する好機だと呼びかける手紙であった。フルシチョフは12月3日付けで手紙を返し、12月10

⁽⁶²⁾ 小山謙二「包括的核実験禁止条約（CTBT）と検証制度について（1）－核爆発実験禁止条約の生い立ち、部分的核実験禁止条約（PTBT）の発効－」4頁

http://www.cpdnp.jp/pdf/CTBT_Koyama.pdf

⁽⁶³⁾ 英国労働党は57年4月の会議で政府に核実験停止を求める決議を出したが、「一方的軍縮か、双務的軍縮か」は党内で大きな争点となった。同年10月の党会議に一方的核軍縮政策を推進する動議が提出されると、左派であるはずのアナイリン・ベヴァンが強く反対して「そんな決議をあげれば外務大臣を裸で会議室へ送ることになる」と発言し、党内の左派たちにショックを与えた。J.B.プリーストリは一方的核軍縮の立場から11月2日の『ニュー・ステーツマン』紙上でベヴァンを批判する論陣を張り、同月末にはキャノン・ジョン・コリンズ（司祭）、キングスレー・マーチン（『ニュー・ステーツマン』編集者）ら一方的核軍縮に賛同する仲間が集い、そこからCNDが形成されてゆく。58年2月に開かれたCND創立集会には5000人が集まった。パートランド・ラッセルやマイケル・フートもCNDに参加した。CND創立過程については、Gerard J. De Groot, *The Bomb: A Life*, Harvard University Press, p.229.などを参照。

⁽⁶⁴⁾ C.Rajagopalachari, 'Positive Co-existence', *New Reasoner*, Spring 1958 number 4.

⁽⁶⁵⁾ *Rajaji*, op.cit., p.112.

⁽⁶⁶⁾ *Rajaji*, ibid., pp.106-107, pp.138-141.

日にそれを受け取ったラジャゴパラチャリがその日のうちに第二信を送り、フルシチョフの第二信は12月31日付けで送られた。フルシチョフの手紙はラジャゴパラチャリの提言への感謝、ソ連の核廃絶に向けた努力とともに、「一方的」核廃棄によって相手が後に続くという見解は楽観的すぎるとして米国による欧州核配備や核軍拡の実情を指摘し、ソ連が「一方的」核廃棄を宣言できない理由を縷々説明するもので、ラジャゴパラチャリは「一方的」行動こそが唯一の道であると重ねて説くという書簡の往復であった。それでもラジャゴパラチャリは、そのときには3年前とは逆に、平和政策においてもはや米国こそ蹟きの石であり、ソ連には希望があると感じていた⁽⁶⁷⁾。

WPCは57年6月のコロンボに続き、翌58年年3月22～25日にニューデリーで執行局会議を開き、五大陸30か国から70人(執行局員は36人)が集まった。モニカも執行局の一員として出席している。日本の原水爆禁止運動に対する後援、アジア・アフリカの民族解放運動と平和運動のリンク、そして1958年7月16日から22日にストックホルムにおいて平和勢力を広く結集して軍縮国際協力会議を開くという方針が重大議案であった⁽⁶⁸⁾。AIPCは世界各地からのゲストを迎えて数々の歓迎企画を用意し、モニカもまたインド文学アカデミーによる作家のレセプションやインド女性協会が執行局の女性たちを招待した晩餐会などに招かれた⁽⁶⁹⁾。幅広い人々を集める構想のストックホルム会議の準備討議や、セイロンのテージャ・グナワルダナやアルゼンチンのマリア・ロサ・オリヴェルのような親しい友人たちとの再会はモニカにとって元気づけられることだったに違いない。

だが、モニカが後にオリヴェルに書いた手紙によると、デリー会議の初日に、アイヴァー・モンターギュはモニカを部屋の隅に連れて行って、一方的核実験中止などをいうのは米国を有利にすることだと説得しようとした⁽⁷⁰⁾。モンターギュはモニカがラジャゴパラチャリの一方的核廃棄論に肩入れするのを苦々しく思っていたわけである。フルシチョフはラジャゴパラチャリへの書簡において一方的実験中止が米英を有利にすることへの危惧を表明していたが、モンターギュの主張はそれと似通ったものだっただろう。

しかし、WPCの中心メンバーの間で「一方的行動」が不人気だったとしても、デリー会議の頃にはすでに「一方的行動」を支持する世論は高まっていた。特に英国では、58年2月には「一方的核軍縮」を追求するCNDが創立集会を開き、5000人が集まり、3月初旬には労働党と英国労働組合会議が、英国はソ連の提案を容れて核実験中止の国際協定を結ぶべきであり、英国政府は核実験を「一方的に」即時中止すべきだという共同声明を発表

⁽⁶⁷⁾ *The Voice of the Uninvolved*, op.cit., pp.117-128.

⁽⁶⁸⁾ *Bulletin of the world Council of Peace (Special Issue, New Delhi Session of the Bureau of the World Council of Peace 22-25 MARCH 1958 April 15, 1958)*, April 15, 1958.

⁽⁶⁹⁾ インド文学アカデミーのレセプションでは、教育省や外務省職員、30人のインド人作家たちがモニカの他、アレクセイ・スルコフ(ソ連)、アルフレド・ヴァレラ(アルゼンチン)やホルヘ・サラエマ(コロンビア)、マリア・ロサ・オリヴェル(アルゼンチン)、など執行局メンバーの作家たちをもてなした。インド女性協会の晩餐会はWPC執行局女性メンバーを対象にしたもので、モニカ・フェルトンはマリア・ロサ・オリヴェル、テージャ・グナワルダナ、そしてジェシー・ストリート(オーストラリア)、イサベル・ブルーム(ベルギー)、コットン夫人、イーブ・ファルジュ夫人(フランス)らとともに招待された。

⁽⁷⁰⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙 6月2日

している⁽⁷¹⁾。また4月初旬にはロンドンから武器庫のあるアルダーマストーンまで数千人規模の反核行進が行われた。その主催団体である行動委員会は、ラジャゴパラチャリが前年にしばしば寄稿した『ピース・ニュース』の編集者ヒュー・ブロックである。

そして、ソ連政府はニューデリー会議からまもない3月31日、「一方的核実験中止」の決定を公表し、他の国々が後に続くよう呼びかけたのである。5月に米国が核実験を再開すると、直後の5月9日、ソ連は米国からの核実験禁止を管理する技術問題を検討するための専門家会議に関する提案に同意し(57年6月にも国際管理に協力することは表明していた)、英米の実験中止を重ねて呼びかけた。ラジャゴパラチャリがフルシチョフに対して提言した「一方的中止」を、ソ連政府は実行に移したわけである。かくして58年夏に専門家会議が開催され、核実験中止の合意を監視する技術的な実行可能性に関する合意に到達した⁽⁷²⁾。その後には紆余曲折がありながらも、1962年の部分的核実験停止条約にいたる核軍縮への道はこのようにして拓かれた。

ソ連の「一方的核実験中止」宣言の後、英国平和委員会も後追的に「一方的行動」を支持するようになる。WPCのプレチン⁽⁷³⁾でその変化に気づいたモニカは、それを喜劇とも悲劇とも感じたが、希望はすてなかった。6月2日付けのオリヴェルへの手紙には、WPCのストックホルム軍縮会議への出席を説得する手紙をラジャゴパラチャリに送るよう頼んでいる。ラジャゴパラチャリは、コロンボ会議と同様、モニカが出席して発言すれば自分の代理になると考えていた。が、モニカはラジャゴパラチャリが「共産党員たちのための飾り」⁽⁷⁴⁾ではなく、WPCを真に変えうる存在だと考え、親友に応援を頼んだわけである。それだけモニカはWPCとそこに集う平和活動家たちに対する希望を保持していたということもできる。彼女はオリヴェルへの同じ手紙に「面倒なのは、運動内部で向こう側は団結していて、私たちの側は個人の集まりでしかないから重みを持ってないことね」と悩みを語りつつ、ハイデラバードやバンガロールで平和会議を始める計画やラジャゴパラチャリの新しい論集を出す計画について楽しげに書き綴っている。

だが、事態はモニカとオリヴェルの予想よりはるかに早く暗転した。6月中、AIPC事務局はストックホルム会議の準備集会を各地で企画したが、マドラスでの会議にモニカは招かれず、しかも問い合わせると、インド代表団のストックホルム出発直前になってようやく「AIPCは貴方の会議出席についてWPCから指示を受けなかった」と伝えてきた。WPCに問うと、モニカの旅行を管轄するのは英国平和委員会だと、遅い返電が届いた。モニカとラジャゴパラチャリは、WPC・AIPC・英国平和委員会の組織を実質的に動かしている人々にモニカを排除する意向が働いていると結論せざるをえなかった。「明白な結論は、私がこの国で平和運動のために行った、あるいは行おうとしたことはすべて無価値だとみなされていたということです。AIPCだけでなく、もっと高いレベルでも。これが私を遠ざけ

⁽⁷¹⁾ 'Labour Calls a Halt to H Bombs: Joint Action by Labour Party and Trades Union, *Bulletin of the World Peace of Council*, April 1, 1958, p.3, p.7.

⁽⁷²⁾ Walter C. Clemens and Franklyn Griffiths, *THE SOVIET POSITION ON ARMS CONTROL AND DISARMAMENT Negotiations and Propaganda, 1954-196*, Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology, 1965, p54.

⁽⁷³⁾ 'BRITISH PEACE COMMITTEE'S NATIONAL CONFERENCE ON MAY 1', *Bulletin of the World Peace of Council*, Jun 2, 1958, p.2.

⁽⁷⁴⁾ 註(70)に同じ。

ておくためばかりか、私を運動から排除する策略だということも明白になりました」⁽⁷⁵⁾。

この処遇でモニカはひどく心を傷つけられたが、それとは別に WPC での活動の限界を感じていたのも事実であった。というのは、ハンガリー事件から一年半余りの 58 年 6 月 16 日、ナジ・イムレが秘密裁判によって死刑を執行され、世界に報道されたのである。モニカは怒りがこみあげて、数日間はそれ以外のことが何も考えられなくなった⁽⁷⁶⁾。

バートランド・ラッセルはそれからまもない 7 月 9 日、自分が WPC と一切無関係だと声明した。『ニューヨークタイムズ』は「ラッセルが赤を非難—英国人、ナジ処刑のため WPC との絆を切る」と見出しをつけて、ストックホルム会議には「共産主義の色」があるので出席しないというラッセルの言葉を記事にしている⁽⁷⁷⁾。CND の執行委員会はラッセルを支持した⁽⁷⁸⁾。

モニカは WPC を離れる決心をし、ラジャゴパラチャリの助言も得て、会議欠席にいたる経過を礼儀正しく英国平和委員会と AIPC 宛てに手紙に書き、友好的な姿勢を崩さずに WPC との関係を終わらせた。旅行手配ができないためストックホルムへ行けないのが非常に残念であること、が、長くインド住まいのため英国平和委員会を離れるのが適切であること、AIPC が外国人をインド代表団の中に入れるのはおかしいと感じたのは当然だったかもしれないこと。そうしたことを書き送り、モニカは WPC から離れたのである⁽⁷⁹⁾。

第3節 『人類は抗議する』増補版の編集

CND の代表は誰一人ストックホルム軍縮会議に参加しなかった。が、CND の創立者の一人で初代議長のジョン・コリンズは、他の問題で意見が対立しようとして、平和を望む人々が平和の達成方法を見つけるために集まって協議する会議が行われるのは良いことだとし、そのような提案を行った WPC に感謝するとして、WPC に友好的なメッセージを送っている。その大意は次のとおりである。

核兵器の製造と貯蔵は、戦争兵器や「有利な交渉材料 (bargaining counter)」のいずれであっても、邪悪であり、正気を失っている。今生きている者たちの生命とこれから生まれてくる世代の命をも脅かす核兵器の利用は、それを考えることだけでもキリストの教えに相容れず、まっとうで人間的な生命観を侵犯する。CND は、他国が核軍縮に賛成しなくとも一方的に行動するよう説得しようとしている。CND の政策は核兵器を一刻も早く除去することである。ストックホルム会議が、全核保有国の一方的行動による核兵器廃棄と、非核保有国が核を保有すべきでないということを合意するように願う。共産主義者もそう

⁽⁷⁵⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、7月11日

⁽⁷⁶⁾ *Rajaji*, op.cit., p.149.

⁽⁷⁷⁾ 'RUSSELL SCORES REDS: Briton Cuts Peace Council Tie Because of Nagy Execution', *New York Times* (1923-Current file); Jul 10, 1958; ProQuest Historical Newspapers: The New York Times (1851-2010) with Index (1851-1993)

⁽⁷⁸⁾ Lawrence S. Wittner, *The Struggle Against the Bomb, Volume two: Resisting the Bomb, A History of the World Disarmament Movement, 1954-1972*, Stanford University Press, p93.

⁽⁷⁹⁾ 註(75)に同じ。

でない人も、クリスチャンもそうでない人も、平和主義者もそうでない人も、平和を願う人が皆、核兵器除去のために為しうるすべてを為すことに合意し、世界の国々からすべての核兵器をなくそう。⁽⁸⁰⁾

コリンズは、メッセージの文中の「有利な交渉材料 (bargaining counter)」という語にかっこをつけて強調している。ラジャゴパラチャリは57年春に『ニュー・ステーツマン』紙に核を「有利な交渉材料」と扱うべきでない、という手紙を送ったが、その後、同紙は「一方的核軍縮」の言論をリードする役割を果たし、CNDの結成に大きな役割を果たしていた。コリンズが「『有利な交渉材料』としての核も邪悪であると言明したのは、そのような英国内の議論をふまえ、「一方的核軍縮」を追求する立場を強調したということであろう。「一方的行動」を呼びかけ続けたラジャゴパラチャリの反核思想は、WPCよりもむしろ、CNDのような英国の新しい平和運動の側から歓迎され、活かされたのである。

WPCはむしろ「ソ連政府の一方的核実験停止」を支持したが、それ以上ではなかった。コリンズのメッセージが掲載されたのと同じブレチンに、英国平和委員会の指導的メンバーで、WPC副会長であったJ.D.バーナルの論文「軍縮議論の分析」が発表されているが、それはもっぱら首脳会談を開催する必要性を論じる内容である⁽⁸¹⁾。モニカはこれを読んだのであろう。58年10月20日付けの手紙でオリヴェルにこう書いている。「WPCに関しては、英国平和委員会がその指導的メンバーたちの党路線に追随して水爆反対キャンペーンを何もしようとしない今、私があのように扱われていなかったとしても、これ以上どのように私が中に留まっていることができたか分かりません。先日、英国平和委員会からニュースの印刷物を入手しました。そこには首脳会談の要求以外何もありません」と。「英国の一方的核廃棄が唯一の正気の政策だと教条主義者たちに確信させるために、これ以上は時間を浪費すべきではない」、「私たちは頑迷な相手に自分の頭をぶつけているよりも、書く仕事をしている方がはるかに良いことだけは確か」⁽⁸²⁾だとモニカは感じていた。

かくしてモニカはラジャゴパラチャリの伝記執筆と『人類は抗議する』の増補版の編集に熱中した。翌59年3月15日付けのオリヴェルへの手紙には、モニカの編集者としての前書きの他は、編集はほぼ終わったと書かれている。出版元はインド平和委員会ではなく、57年に設立されたインド政府系の出版社ナショナル・ブック・トラストに決まっていた。当時モニカが考えていた増補版の題名は『The Tree of Knowledge (知恵の樹)』であった⁽⁸³⁾。54年の『ニューヨークタイムズ』に宛てた手紙の文章から採った言葉だろう。ラジャゴパラチャリは、原爆を旧約聖書の創世記に登場する「知恵の樹」の禁断の果実にたとえ、ヒロシマへの原爆投下によって樂園が失われたとし、他者の行動にかわりなく一方的に原爆を廃棄して恐怖のない世界をつくるのが、日本への原爆によって1945年8月に失われ

⁽⁸⁰⁾ 'Message from Canon L. John COLLINS, Chancellor of St. Paul's Cathedral, Chairman of the Campaign for Nuclear Disarmament', *Bulletin of the World Peace of Council*, August 15, 1958, p.9.

⁽⁸¹⁾ 'Professor J. D. BERNAL, F.R.S. (Great Britain), Vice-President of the World Council of Peace, ANALYSIS OF DISARMAMENT DISCUSSIONS', *Ibid.*, p.17.

⁽⁸²⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年10月20日

⁽⁸³⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1959年3月15日

た楽園を回復する唯一の道だと書いた⁽⁸⁴⁾。確かに、「知恵の樹」という言葉には、ラジャゴパラチャリの一方的核兵器廃絶論が集約的に表現されているように思われる。

モニカは『人類は抗議する』増補版の編集に力を尽くし、その仕事に大きな価値を感じていた。オリヴェルへの手紙に、彼女はこう書いている。「ラジャジは、これは彼の本じゃなくて私の本だと主張しています。もちろんこれはナンセンス。私に言えるのは、この新しい資料は、読めばラジャジの思想ばかりでなく、核実験中止に関する交渉の紆余曲折が見てとれる素晴らしい作品になっているの。全体を読んで見ると、偉大な歴史的な重要性をもつコレクションだと思えるわ」⁽⁸⁵⁾。

増補版には、ジャゴパラチャリのスピーチや『スワラジャ』に発表した論説や手紙など約100篇が集められた。約三分の一は『人類は抗議する』からの再録で、他の三分の二が57年5月から59年3月に書かれている。本章の第一節に言及したWPCコロombo会議に送られたメッセージや第二節に取り上げたフルシチョフとの往復書簡も収録されている。

実際にこの本がナショナル・ブック・トラストから出版されるのは、それから10か月も先の60年1月のことであり、その間にさまざまな調整があったようだ。本の表題は、『The Voice of the Uninvolved (関与しない者の声)』となっている。また、モニカが書く予定だったはずの編集者の前書きがないどころか、モニカは編集者としての名前を全く出していない。

『The Voice of the Uninvolved』という題名は、モニカが3月15日にオリヴェルへ手紙を書いた後にラジャゴパラチャリが発表した新しい文章から採ったものだろう。59年3月16日付けで彼は再び『ニューヨークタイムズ』に投稿し、米国が太平洋の核実験を中止しないことに抗議し、東西冷戦にくみしない人々が放射能汚染を強いられて冷戦の囚人にされている現状を訴えた⁽⁸⁶⁾。続いて3月21日の『スワラジャ』誌に「To the Uninvolved」を寄せ、米国が世界的世論・科学者の意見・冷戦にくみしない諸国、そして人間の良識に反して核実験を続行していることを批判している⁽⁸⁷⁾。これらから考えると「the uninvolved (関与しない者)」の意味は、日本語に直訳すると分かりにくい、「冷戦政治や核実験に加担しない(したくない)にもかかわらず、核の脅威にさらされている人々」を指しているということであろう。

モニカが編集者として名前を出さなかった経緯の詳細はまだ分からない。名声を求めて行った仕事でなかったことは間違いない。『人類は抗議する』の編集・出版がWPC-AIPCの間で期待したような反応を得られなかったことで挫折感があり、自分の名を出す積極的な意味を感じなくなっていたのかもしれない。また、ダライラマのインド亡命、ラジャゴパラチャリによるスワタントラ党の結成、中印戦争の勃発、インド共産党の分裂という1959年3月以後のインド政治の激しい流動の中で、ラジャゴパラチャリとの距離の取り方に慎重になっていたのかもしれない。この本に収録されたラジャゴパラチャリの論説が日付の無い「チベット以後」であることは、何か暗示的であるようにも思われる⁽⁸⁸⁾。

オリヴェルへ宛てた59年10月1日付けの手紙には、モニカがこうした政治流動の中で傷

⁽⁸⁴⁾ 註(15)に同じ。

⁽⁸⁵⁾ 註(83)に同じ。

⁽⁸⁶⁾ 'Formula to Break the Deadlock', *The Voice of the Uninvolved*, op.cit., pp.195-196.

⁽⁸⁷⁾ Ibid., pp.196-197.

⁽⁸⁸⁾ 'After Tibet', *ibid.*, pp.197-198.

つきもし、困惑もしつつ、執筆を続けることで姿勢を前向きに保っていたことが窺われる。手紙の一説にはこう書かれている。「あなたがラジャゴパラチャリが新しい政党を開始したことについて何か読んだかどうかわかりません。スワタントラ党というのです。それは、一種の保守的な反対であり、過去数か月のあいだ、大きな動揺をひきおこしています。言うまでもなく、私は関与していないわ。それどころか。実際、 коммуニストが私を危険な右翼の友人だとみなしている一方、ラジャジの今の仲間たちは私を邪悪な左派の同行者だとみなしている。それに気がついて、傷ついたわ！ でも、本をおえることは、私が自分のユーモア感覚を快復するのに役立つし、孤立した独立のすばらしい頂点にいるというセンセーションを楽しむ助けになるわね」⁽⁸⁹⁾。

かくして『関与しない者の声』は1960年1月、モニカの関与が何も表明されない形で出版されたのである。

(終わりに)

本稿は、モニカ・フェルトンの1956年末から59年末までの足跡をたどり、初期の国際的な原水爆禁止運動への貢献を明らかにした。55年の世界母親大会で長崎の山口美代子に出会い、翌56年に来日して第二回原水爆禁止世界大会に出席したモニカは、核兵器が人類にもたらす災禍を胸に刻み、ガンジー主義の伝統を継ぐ平和主義者であるラジャゴパラチャリの反核思想に感銘を受け、彼の論説や書簡などを編集し、世界に発信した。

56年3月に書かれた『あたりまえの女たち』の序文に、モニカはジュネーブ四巨頭会談によって平和と軍縮へ向かう新しい時代への希望が生まれており、軍拡を推進する諸国権力者がジュネーブ精神を圧殺し、人類の未来を破壊と恐怖へ導こうとしているが、世界中の人々が「来るべき世代のための幸福の生活」を実現するために働き闘っている、と書いた。しかし、56年秋のスエズ危機とハンガリー事件は、もはや諸国間のジュネーブ精神は完全に消失し、核戦争の危険をはらむ東西冷戦が再び熾烈化しつつあることを表面化させた。この新しい危機の時代にモニカはインドに移り住んだ。東西のいずれか一方に身を寄せるのではなく、平和五原則を掲げて非同盟諸国の連帯運動の旗手となっていたインドは、それだけでもモニカをひきつけるところがあったであろう。

ラジャゴパラチャリとの出会いはモニカの人生に大きな影響を与えることになった。モニカは、マルクス主義者であり社会主義者であることを自認してきたが、英国労働党からはつとに除名されている。また、西側が「ソ連のフロント組織」とレッテルを貼って排撃するWIDFやWIPCの舞台で活動し、各国の共産党員たちと親しく協力しあうことに躊躇はなかったが、だからといってスターリニズムにくみしようとは考えなかった。ラジャゴパラチャリの「一方的」核廃絶論は人類普遍の立場から核兵器の廃絶を提唱する平和思想であり、モニカは、人類の滅亡へといたりかねない核軍拡時代の危機から脱出し「来るべき世代のための幸福の生活」を守りうる生命の思想をここに見つけたとえいえるだろう。

そしてラジャゴパラチャリの「一方的」核廃絶論は、50年代後半に登場する新しい反核運動の波に影響を与えた。本稿に示したとおり、「一方的」核実験中止を求める運動とし

⁽⁸⁹⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1959年10月1日

て英国にCNDが結成されたのは57年末であったが、同年春に『ニュー・ステーツマン』紙上にラジャゴパラチャリの「一方的」反核を訴える手紙が掲載されている。モニカが当初望んだのはラジャゴパラチャリをWPCの国際舞台に連れ出し、彼女自身が感銘を受けたラジャゴパラチャリの反核思想によって国際平和運動を力づけることであった。その願いはWPCの枠内では実現できなかったが、モニカはラジャゴパラチャリの思想を世界に伝える情熱を失わなかった。彼女は『人類は抗議する』増補版の編集が一段落したとき、親友であるマリア・ロサ・オリヴェルへの私信の中で、「ラジャジの思想ばかりでなく、核実験中止に関する交渉の紆余曲折が見てとれる素晴らしい作品」であり、「全体を読んでも見ると、偉大な歴史的な重要性をもつコレクションになっている」と胸をはっている。静かにWIDFやWPCの国際舞台から退場したモニカは、このようにしてインドのマドラスからラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信した。核廃絶に向けて力を合わせようというローザンヌや長崎の約束を、モニカはモニカ自身の方法で果たしたわけである。